

巻頭言

言葉と私

上賀茂神社の夏越大祓式を見学した。夕刻の日の残る時に「水無月の夏越しの祓する人は千歳の命延ぶと言ふなり」と唱えながら茅ノ輪をくぐる。大祓の人形に名前と数えの年齢を記し、身体の彼方此方を撫で息を吹きかけてこの半年の罪や穢れを移し、祓をお願いする。

雅楽が演奏される中、神官が入場し着座する。この頃にはあたりは闇に閉ざされ、奈良の小川に赤々と灯された篝火が周囲の情景を浮かび上がらせる。川に刺された幾本もの斎串が朱色に染まり、川音だけが静かに響く。藤原家隆卿の「風そよぐならの小川の夕暮れはみそぎ夏ものしるしなりける」の和歌が朗々と唱えられた後、茅萱で神官のお祓いを受ける。

大祓祝詞が唱えられる中、人々の穢れを宿した何千枚もの人形が、神官の手からまるで命を宿した者のように次々に奈良の小川の流れの中に舞い落ち、流されて行く様は限りなく幻想的であった。

現在は新暦の六月三十日に大祓が行われているが、前近代は新暦でいうと七月終わり頃に夏越祓が行われていた。したがって大祓が終わるとすぐに立秋を迎える。夏越祓の翌日からは暦の上では秋となる。この間を伝えるのが次の歌である。

六月のつごもりの日よめる

夏と秋と行きかふ空のかよひぢはかたへすずしき風や吹くらむ（凡河内躬恒『古今和歌集』夏）

八世紀から十世紀は「氣候の小最良期」と呼ばれる大きな山をもつ温暖な時代」（吉野正敏氏「4〜10世紀における氣候変動と人間活動」『地学雑誌』一一八巻六号）であったという。近年の夏は暑さそのものが災害に喩えられるような異常なものであるが、平安時代の盆地の夏も暑かったであろう。上流貴族ですら時折しか手に入らない氷室の氷だけで夏を乗り切っていたのである。時代を経てもこの歌は、忍び寄ってくる季節のわずかばかりの変化も見逃さない当時の人々の感覚を今に伝える。

半年間の厄と穢れを祓う夏越祓は、今も昔も変わらない京都の風物詩である。残る半年間の無病息災を祈る心は、王朝貴族にとってはなお切実なものであったろう。一種独特の抑揚をもって唱えられる祝詞の文言を耳に、流れに漂いながら目の前を過ぎて行く連なる人形を見つめると、言葉の力が発動するかのようになり、祓うことによって遺る罪が消滅し清められるように感じられる。祭祀の言語が時空を超えて人間を同一の観念に誘う力を持つことを実感した。

目まぐるしい変化の中で生きること之余儀なくされる現代人にとって、心の中によりどころとなる普遍的な根源をもつことは大切なことであろう。私の研究は一三〇〇年前の断片的な文献をつなぎ合わせてその間を埋め、時空を超えて目の前に当時の人々の思惟や感情を顕すことにある。生きた言葉を用いることの重要性や難しさと日々戦っている。

（鳥谷 知子）